

I am a Cat – Chapter 5a (Natsume Sōseki)

五

にじゅうよじかん できごと も か よ すく
二十四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく読むには少なくとも二十四時間かかるだろう、
いくら しゃせいぶん こすい わがはい どうていねこ くわだ およ げいとう じはく
いくら写生文を鼓吹する吾輩でもこれは到底猫の企て及ぶべからざる芸当と自白せざるを
え したが づつ していかにか 吾輩の主人が、二六時中 精細なる描写に 備する 奇言奇行を弄す
るにも 関わらず 逐一これを 読者に 報知するの 能力と 根気の ないのは はなはだ 遺憾である。遺
憾ではあるが やむを得ない。休養は猫といえども 必要である。鈴木君と 迷亭君の 帰ったあ
とは 木枯しのはたと 吹き息んで、しんしんと 降る 雪の夜のごとく 静かになった。主人は 例のご
とく 書斎へ 引き籠る。小供は 六畳の間へ 枕を ならべて 寝る。一間半の 襖を 隔てて 南向
の室には 細君が 数え年 三つになる、めん子さんと 添乳して 横になる。花曇りに 暮れを 急いだ
ひ と お おもて とお こまげた おと て と ちゃ ま ひび と なりちょう げしゆく
日は 疾く 落ちて、表を通る 駒下駄の 音さえ 手に取るように 茶の間へ 響く。隣町の下宿で
みんてき ふ た えたり つづ ねむ じてい おりおりにぶ しげき あた そと おおかたおぼろ
明笛を吹くのが 絶えたり 続いたりして 眠い 耳底に 折々 鈍い 刺激を 与える。外面は 大方 朧で
あろう。晩餐に 半ぺんの 煮汁で 鮑貝を からにした 腹では どうしても 休養が 必要である。

うけたま せけん ねこ こい しょう はいかいしゅみ げんしょう はる ちょうない
ほのかに 承われれば 世間には 猫の恋とか 称する 俳諧趣味の 現象があつて、春さきは 町内
の 同族共の 夢安から ぬまで 浮かれ 歩るく 夜もあるとか 云うが、吾輩はまだ かかる 心的変化に
そうほう こと うちゅうてき かつりよく しみ ざいてん しみ
遭逢した 事はない。そもそも 恋は 宇宙的の 活力である。上は 在天の 神ジュピターより 下は
どちゅう な みみず いた みち うきみ やつ ばんぶつ なら
土中に 鳴く 蚯蚓、おけらに 至るまで この道にかけて 浮身を 躰すのが 万物の 習いであるから、
吾輩どもが 朧うれしと、物騒な 風流氣を 出すのも 無理のない 話しである。回顧すれば かく 云
う 吾輩も 三毛子に 思い焦がれた 事もある。さんかくしゅぎ ちょうほんかねだ れいじょうあべかわ とみこ
寒月君に 恋慕したと 云う 噂である。それだから 千金の 春宵を 心も 空に 満天下の 雌猫
おねこ くる まわ ぼんのう まよい けいべつ ねん もうとう さそ
雄猫が 狂い 廻るのを 煩悩の 迷のと 軽蔑する 念は 毛頭ないのであるが、いかんせん 誘われて
も そんな 心が出ないから 仕方がない。吾輩目下の 状態は ただ 休養を 欲するのみである。こう
眠くては 恋も 出来ぬ。の そのそと 小供の 布団の 裾へ 廻って 心地 快く 眠る。……

め あ み しゅじん ま しょさい しんしつ き さいくんと なり の ふとん
ふと眼を開いて 見ると 主人は いつの間にか 書斎から 寝室へ 来て 細君の 隣に 延べてある 布団
なか にもぐ こ くのせ ね とき かなら よこもじ こほん
の中に いつの間にか 潜り 込んでいる。主人の 癖として 寝る時は 必ず 横文字の 小本を 書斎から
たずさ く よこ ほん にページ つづ よ こと も き
携えて 来る。しかし 横になって この本を 二頁と 続けて 読んだ 事はない。ある時は 持って 来

まくらもと お て ふ こと いちぎょう さ
て枕元へ置いたなり、まるで手を触れぬ事さえある。一行も読まぬくらいならわざわざ提
げてくる必要もなさそうなものだが、そこが主人の主人たるところでいくら細君が笑っても、
よ せ い けつ しょうち まいよ くろうせんばん はこ
止せと云っても、決して承知しない。毎夜読まない本をご苦労千万にも寝室まで運んでく
る。ある時はよくば さんよんさつ かか く まいばん だいじてん
さえ抱えて来たくらいである。思うにこれは主人の病気で贅沢な人が竜文堂に鳴る松風の
おと き しょうつ ねむり さそ きかい かつばん すいみんざい
音を聞かないと寝つかれないごとく、主人も書物を枕元に置かないと眠れないのであろう、し
て見ると主人に取っては書物は読む者ではない眠を誘う器械である。活版の睡眠剤であ
る。

こんや なに あ のぞ あか うす くちひげ さき
今夜も何か有るだろうと覗いて見ると、赤い薄い本が主人の口髯の先につかえるくらいな
ちい はんぶんひら ころ ひだり おやゆび あいだ はさ
地位に半分開かれて転がっている。主人の左の手の拇指が本の間に挟まったままであると
ころから推すと奇特にも今夜は五六行 読んだものらしい。赤い本と並んで例のごとくニッケ
ルのおもとどけい はる に あ さむ いろ はな
ルの袂時計が春に似合わぬ寒き色を放っている。

ちのみご いっしゃく ほう だ くち はず
細君は乳呑児を一尺ばかり先へ放り出して口を開いていびきをかいて枕を外している。およ
そ人間において何が見苦しいと云って口を開けて寝るほどの不体裁はあるまいと思う。猫など
しょうがい はじ がんらい おと だ はな くうき とどん どうぐ
は生涯こんな恥をかいた事がない。元来口は音を出すため鼻は空気を吐呑するための道具で
ある。もっともきた ほう ゆ ぶしょう けんやく けっか
鼻で言語を使うようなズーズーもあるが、鼻を閉塞して口ばかりで呼吸の用を弁じているの
はズーズーよりも見ともないと思う。第一天 井から鼠の糞でも落ちた時危険である。

こども ほう み おや おと てい ね あね こ けんり
小供の方はと見るとこれも親に劣らぬ体たらくで寝そべっている。姉のとん子は、姉の権利
はこんなものだと云わぬばかりにうんと右の手を延ばして 妹の耳の上へのせている。妹の
すん子はその復讐に姉の腹の上に片足をあげて踏反り返っている。双方共寝た時の姿勢よ
り 九 十度はたしかに廻転している。しかもこの不自然なる姿勢を維持しつつ 両人とも不平
も云わずおとなしく じゆくすい
熟睡している。

はる ともしび かくべつ てんしんらんまん ぶふうりゆうきわ こうけい うち りょうや お
さすがに春の灯火は格別である。天真爛漫ながら無風流極まるこの光景の裏に良夜を惜
しめとばかり床しげに輝やいて見える。もう何時だろうと室の中を見廻すと四隣はしんとして
ただ聞えるものは柱時計と細君のいびきと遠方で下女の齒軋りをする音のみである。この下

女は人から齒軋りをすると云われるといつでもこれを否定する女である。私は生れてから今日に至るまで齒軋りをした覚はございませんと強情を張って決して直しましようとも御気の毒でございませとも云わず、ただそんな覚はございませんと主張する。なるほど寝ていてする芸だから覚はないに違ない。しかし事實は覚がなくても存在する事があるから困る。世の中には悪い事をしておりながら、自分はどこまでも善人だと考えているものがある。これは自分が罪がないと自信しているのだから無邪気で結構ではあるが、人の困る事實はいかに無邪気でも滅却する訳には行かぬ。こう云う紳士淑女はこの下女の系統に属するのだと思う。——夜は大分更けたようだ。

台所の雨戸にトントンと二返ばかり軽く中った者がある。はてな今頃人の来るはずがない。大方例の鼠だろう、鼠なら捕らん事に極めていから勝手にあばれるが宜しい。——またトントンと中る。どうも鼠らしくない。鼠としても大変用心深い鼠である。主人の内の鼠は、主人の出る学校の生徒のごとく日中でも夜中でも乱暴狼藉の練修に余念なく、憫然なる主人の夢を驚破するのを天職のごとく心得ている連中だから、かくのごとく遠慮する訳がない。今のはたしかに鼠ではない。せんだってなどは主人の寢室にまで闖入して高からぬ主人の鼻の頭を嚙んで凱歌を奏して引き上げたくらいの鼠にしてはあまり臆病すぎる。決して鼠ではない。今度はギーと雨戸を下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出るだけ緩やかに、溝に添うて滑らせる。いよいよ鼠ではない。人間だ。この深夜に人間が案内も乞わず戸締を外ずして御光来になるとすれば迷亭先生や鈴木君ではないに極っている。御高名だけはかねて承わっている泥棒陰士ではないか知らん。いよいよ陰士とすれば早く尊顔を拝したいものだ。陰士は今や勝手の上に大いなる泥足を上げて二足ばかり進んだ模様である。三足目と思う頃揚板に蹶いてか、ガタリと夜に響くような音を立てた。吾輩の背中の毛が靴刷毛で逆に擦すられたような心持がする。しばらくは足音もしない。細君を見ると未だ口をあいて太平の空気を夢中に吐吞している。主人は赤い本に拇指を挟まれた夢でも見ているのだろう。やがて台所でマチを擦る音が聞える。陰士でも吾輩ほど夜陰に眼は利かぬと見える。勝手がわるくて定めし不都合だろう。

この時吾輩は躊躇まりながら考えた。陰士は勝手から茶の間の方面へ向けて出現するのであろうか、または左へ折れ玄関を通過して書齋へと抜けるであろうか。――足音は襖の音と共に椽側へ出た。陰士はいよいよ書齋へ這入った。それぎり音も沙汰もない。

吾輩はこの間に早く主人夫婦を起してやりたいものだとようやく気が付いたが、さてどうしたら起きるやら、一向要領を得ん考のみが頭の中に水車の勢で廻転するのみで、何等の分別も出ない。布団の裾を啣えて振って見たらと思つて、二三次やって見たが少しも効用がない。冷たい鼻を頬に擦り付けたらと思つて、主人の顔の先へ持つて行ったら、主人は眠ったまま、手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを否やと云うほど突き飛ばした。鼻は猫にとつても急所である。痛む事おびたしい。此度は仕方がないからにやーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとしたが、どう云うものかこの時ばかりは咽喉に物が痞えて思ふような声が出ない。やつとの思いで渋りながら低い奴を少々出すと驚いた。肝心の主人は覚める気色もないのに突然陰士の足音がし出した。ミチリミチリと椽側を伝つて近づいて来る。いよいよ来たな、こうなつてはもう駄目だと諦らめて、襖と柳行李の間にしばしの間身を忍ばせて動静を窺がう。

陰士の足音は寢室の障子の前へ来てびたりと已む。吾輩は息を凝らして、この次は何をするだろうと一生懸命になる。あとで考えたが鼠を捕る時は、こんな気分になれば訳はないのだ、魂が両方の眼から飛び出しそうな勢である。陰士の御蔭で二度とない悟を開いたのは実にありがたい。たちまち障子の棧の三つ目が雨に濡れたように真中だけ色が変わる。それを透して薄紅なものがだんだん濃く写つたと思つると、紙はいつか破れて、赤い舌がぺろりと見えた。舌はしばしの間で暗い中に消える。入れ代つて何だか恐しく光るものが一つ、破れた孔の向側にあらわれる。疑いもなく陰士の眼である。妙な事にはその眼が、部屋の中にある何物をも見ないで、ただ柳行李の後に隠れていた吾輩のみを見つめているように感ぜられた。一分にも足らぬ間ではあつたが、こう睨まれては寿命が縮まると思つたくらいである。もう我慢出来んから行李の影から飛出そうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわれた。

わがはい じょじゆつ じゆんじよ ふ じ ちんきやく どろぼういんし ひと さいしよくん ごしょうかい
吾輩は叙述の順序として、不時の珍客なる泥棒陰士その人をこの際諸君に御紹介する
えいよ ゆう わけ まえ ひけん かいちん こうりよ わずら こと
の栄誉を有する訳であるが、その前ちょっと卑見を開陳してご高慮を煩わしたい事がある
こだい かみ ぜんちぜんのう あが ヤソキョウ にじゆつせいき こんにち
る。古代の神は全智全能と崇められている。ことに耶蘇教の神は二十世紀の今日までもこの
めん かぶ ぞくじん かんがえ とき むちむのう
全智全能の面を被っている。しかし俗人の考うる全智全能は、時によると無智無能とも
かいしゃく でき い あきら
解釈が出来る。こう云うのは明かにパラドックスである。しかるにこのパラドックスを道破
もの てんちかいびやくいらい じぶん まんざら
した者は天地開闢以来吾輩のみであろうと考えると、自分ながら満更な猫でもないと言う
きよえいしん で ぜひと も りゆう もう あ ばか でき
虚栄心も出るから、是非共ここにその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ないと言う事を、
こうまん にんげんしよくん のうり たた こ てんちばんゆう つく み
高慢なる人間諸君の脳裏に叩き込みたいと考える。天地万有は神が作ったような、して見れ
ば人間も神の御製作であろう。現に聖書とか云うものにはその通りと明記してあるそうだ。さ
ごせいさく げん せいしょ とお めいき
てこの人間について、人間自身が数千年来の観察を積んで、大に玄妙不思議がると同時
しょうにん かたむ じじつ ほか
に、ますます神の全智全能を承認するように傾いた事実がある。それは外でもない、人間
もかようにうじゃうじゃいるが同じ顔をしている者は世界中に一人もいない。顔の道具は
むろんきま おおき たいがい に よつ かんげん かれら みんな ざいりょう
無論極っている、大きさも大概は似たり寄ったりである。換言すれば彼等は皆同じ材料か
つく あ かかわ けっか できあが
ら作り上げられている、同じ材料で出来ているにも関わらず一人も同じ結果に出来上っておら
ん。よくまああれだけの簡単な材料でかくまで異様な顔を思いついた者だと思つくと、製造家の
ぎりょう かんぶく え どくそうてき そうぞうりよく へんか
伎倆に感服せざるを得ない。よほど独創的な想像力がないとこんな変化は出来ないのであ
いちだい がこう せいりよく しょうこう もと じゅうにさんしゆいがい
る。一代の画工が精力を消耗して変化を求めた顔でも十二三種以外に出る事が出来んの
お いて うけお てぎわ かくべつ きょうたん え
をもって推せば、人間の製造を一手で受負った神の手際は格別な者だと驚嘆せざるを得な
とうていにんげんしゃかい もくげき え てい ぜんのうてき
い。到底人間社会において目撃し得ざる底の伎倆であるから、これを全能的伎倆と云つて
もさ つか てん おそ い
も差し支えないだろう。人間はこの点において大に神に恐れ入っているようである、なるほど
かんさつてん おそ い かた
人間の観察点から云えばもっともな恐れ入り方である。

ねこ たちば い どういつ じじつ かみ むのうりよく しょうめい かいしゃく
しかし猫の立場から云うと同一の事実がかえって神の無能力を証明しているとも解釈が
でき ぜんぜんむのう にんげんいじょう のうりよく けつ もの だんてい でき
出来る。もし全然無能でなくとも人間以上の能力は決してない者であると断定出来るだ
ろうと思つ。神が人間の数だけそれだけ多くの顔を製造したと云うが、当初から胸中に
せいさん へんか しめ ねこ しゃくし おな つく
成算があつてかほどの変化を示したのか、または猫も杓子も同じ顔に造ろうと思つてやり
かけて見たが、とうてい旨く行かなくて出来るのも出来るのも作り損ねてこの乱雑な状態に
おちい わか かれらがんめん こうぞう せいこう きねん み どうじ
陥つたものか、分らないではないか。彼等顔面の構造は神の成功の記念と見らると同時に

失敗の痕迹とも判ぜらるるではないか。全能とも云えようが、無能と評したって差し支えはない。彼等人間の眼は平面の上に二つ並んでいるので左右を一時に見る事が出来んから事物の半面だけしか視線内に這入らんのは気の毒な次第である。立場を換えて見ればこのくらい単純な事実は彼等の社会に日夜間断なく起りつつあるのだが、本人逆せ上がって、神に呑まれているから悟りようがない。製作の上に変化をあらわすのが困難であるならば、その上に徹頭徹尾の模倣を示すのも同様に困難である。ラファエルに寸分違わぬ聖母の像を二枚かけと注文するのは、全然似寄らぬマドンナを双幅見せろと逼ると同じく、ラファエルにとっては迷惑であろう、否同じ物を二枚かく方がかえって困難かも知れぬ。弘法大師に向って昨日書いた通りの筆法で空海と願いますと云う方がまるで書体を換えてと注文されるよりも苦しいかも知らん。人間の用うる国語は全然模倣主義で伝習するものである。彼等人間が母から、乳母から、他人から実用上の言語を習う時には、ただ聞いた通りを繰り返すよりほかに毛頭の野心はないのである。出来るだけの能力で人真似をするのである。かように人真似から成立する国語が十年二十年と立つうち、発音に自然と変化を生じてくるのは、彼等に完全なる模倣の能力がないと云う事を証明している。純粹の模倣はかくのごとく至難なものである。従って神が彼等人間を区別の出来ぬよう、悉皆焼印の御かめのごとく作り得たならばますます神の全能を表明し得るもので、同時に今日のごとく勝手次第な顔を天日に曝らさして、目まぐるしきまでに変化を生ぜしめたのはかえってその無能力を推知し得るの具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があってこんな議論をしたか忘れてしまった。本を忘却するのは人間にさえありがちの事であるから猫には当然の事さと大目に見て貰いたい。とにかく吾輩は寢室の障子をあけて敷居の上にぬっと現われた泥棒陰士を瞥見した時、以上の感想が自然と胸中に湧き出でたのである。なぜ湧いた？——なぜと云う質問が出れば、今一応考え直して見なければならん。——ええと、その訳はこうである。

吾輩の眼前に悠然とあらわれた陰士の顔を見るとその顔が——平常神の製作についてその出来栄をあるいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに、それを一時に打ち消すに足るほどの特徴を有していたからである。特徴とはほかではない。彼の眉目がわが親愛なる好男子水島寒月君に瓜二つであると云う事である。吾輩は無論泥棒に多くの知己は持たぬ

が、その行為の乱暴なところから平常想像して私かに胸中に描いていた顔はないでもない。
小鼻の左右に展開した、一銭銅貨くらいの眼をつけた、毬栗頭にきまっていると自分で勝手に極めたのであるが、見ると考えると天地の相違、想像は決して遅くするものではない。この陰士は背のすらりとした、色の浅黒い一の字眉の、意気で立派な泥棒である。年は二十六七歳でもあろう、それすら寒月君の写生である。神もこんな似た顔を二個製造し得る手際があるとすれば、決して無能をもって目する訳には行かぬ。いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変になって深夜に飛び出して来たのではあるまいかと、はっと思ったくらいよく似ている。ただ鼻の下に薄黒く髯の芽生えが植え付けてないのでさては別人だと気が付いた。寒月君は苦味ばした好男子で、活動小切手と迷亭から称せられたる、金田富子嬢を優に吸収するに足るほどな念入れの製作物である。しかしこの陰士も人相から観察するとその婦人に対する引力上の作用において決して寒月君に一步も譲らない。もし金田の令嬢が寒月君の眼付や口先に迷ったのなら、同等の熱度をもってこの泥棒君にも惚れ込まなくては義理が悪い。義理はとにかく、論理に合わない。ああ云う才気のある、何でも早分りの性質だからこのくらいの事は人から聞かんでもきつと分るのであろう。して見ると寒月君の代りにこの泥棒を差し出しても必ず満身の愛を捧げて琴瑟調和の実を挙げらるるに相違ない。万一寒月君が迷亭などの説法に動かされて、この千古の良縁が破れるとしても、この陰士が健在であるうちは大丈夫である。吾輩は未来の事件の発展をここまで予想して、富子嬢のために、やっと安心した。この泥棒君が天地の間に存在するのは富子嬢の生活を幸福ならしむる一大要件である。

陰士は小脇になにか抱えている。見ると先刻主人が書斎へ放り込んだ古毛布である。唐棧の半纏に、御納戸の博多の帯を尻の上にむすんで、生白い脛は膝から下むき出しのまま今や片足を挙げて畳の上へ入れる。先刻から赤い本に指を噛まれた夢を見ていた、主人はこのとき寝返りを堂と打ちながら「寒月だ」と大きな声を出す。陰士は毛布を落して、出した足を急に引き込めます。障子の影に細長い向脛が二本立ったまま微かに動くのが見える。主人はうーん、むにやむにやと云いながら例の赤本を突き飛ばして、黒い腕を皮癬病みのようにぼりぼり掻く。そのあとは静まり返って、枕をはずしたなり寝てしまう。寒月だと云ったのは全く我知らずの寝言と見える。陰士はしばらく椽側に立ったまま室内の動静をうかがっ

ていたが、主人夫婦の熟睡しているのを見済してまた片足を畳の上に入れる。今度は寒月だと云う声も聞えぬ。やがて残る片足も踏み込む。一穂の春灯で豊かに照らされていた六畳の間は、陰士の影に鋭どく二分せられて柳行李の辺から吾輩の頭の上を越えて壁の半ばが真黒になる。振り向いて見ると陰士の顔の影がちょうど壁の高さの三分の二の所に漠然と動いている。好男子も影だけ見ると、八つ頭の化け物のごとくまことに妙な恰好である。陰士は細君の寝顔を上から覗き込んで見たが何のためかにはやにやと笑った。笑い方までが寒月君の模写であるには吾輩も驚いた。

細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの釘付けにした箱が大事そうに置いてある。これは肥前の国は唐津の住人多々良三平君が先日帰省した時御土産に持って来た山の芋である。山の芋を枕元へ飾って寝るのはあまり例のない話しではあるがこの細君は煮物に使う三盆を用箆筒へ入れるくらい場所の適不適と云う観念に乏しい女であるから、細君にとれば、山の芋は愚か、沢庵が寝室に在っても平気かも知れん。しかし神ならぬ陰士はそんな女と知ろうはずがない。かくまで鄭重に肌身に近く置いてある以上は大切な品物であろうと鑑定するのも無理はない。陰士はちょっと山の芋の箱を上げて見たがその重さが陰士の予期と合して大分目方が懸りそうなのですこぶる満足の体である。いよいよ山の芋を盗むなと思つたら、しかもこの好男子にして山の芋を盗むなと思つたら急におかしくなった。しかし滅多に声を立てると危険であるからじっと忪えている。

やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ初めた。なにかからげるものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寝る時に解きすてた縮緬の兵古帯がある。陰士は山の芋の箱をこの帯でしっかり括って、苦もなく背中へしよう。あまり女が好く体裁ではない。それから小供のちゃんちゃんを二枚、主人のめり安の股引の中へ押し込むと、股のあたりが丸く膨れて青大将が蛙を飲んだような——あるいは青大将の臨月と云う方がよく形容し得るかも知れん。とにかく変な恰好になった。嘘だと思ふなら試しにやってみるがよろしい。陰士はめり安をぐるぐる首っ環へ捲きつけた。その次はどうするかと思うと主人の紬の上着を大風呂敷のように広げてこれに細君の帯と主人の羽織と繻絆とその他あらゆる雑物を奇麗に畳んでくるみ込む。その熟練と器用なやり口にもちよつと感心した。それから細君の帯上げとしごきとを結び合わせてこの包みを括って片手にさげる。まだ頂戴するものは無いかな

と、あたりを見廻していたが、主人の頭あたまの先さきに「朝日あさひ」の袋ふくろがあるのを見付けて、ちょっと袂たもとへ投げ込む。またその袋の中から一本出してランプに翳いっぽんだして火かざを点ひける。旨うまそうに深く吸すって吐はき出した煙けむりが、乳色ちちいろのホヤを繞めぐってまだ消きえぬ間に、陰士あしおとの足音えんがわは次第しだいに遠とおのいて聞きえなくなった。主人夫婦しゅじんふうふは依然いぜんとして熟じゆくすい睡すいしている。人間にんげんも存外ぞんがいうかつ迂濶うかつなものである。

吾輩わがはいはまた暫時ざんじの休養きゅうようを要ようする。のべつに喋舌しゃべっていは身体しんたいが続つづかない。ぐっと寝込ねこんで眼めが覚さめた時は弥生やよいの空そらが朗ほがらかに晴はれ渡わたって勝手口かっぺぐちに主人夫婦しゅんさが巡査たいだんと対談たいだんをしている時ときであった。

「それでは、ここから這入はいって寢室しんしつの方ほうへ廻まわったんですな。あなた方は睡眠中がた すいみんちゅうで一向いっこう気がつかきなかつたのですな」

「ええ」と主人すこは少しきま極きまりがわるそうである。

「それで盗難とうなんに罹かかったのは何時頃なんじごろですか」と巡査じゅんさは無理むりな事ことを聞きく。時間じかんが分わかるくらいなら何なにも盗ぬすまれる必要ひつようはないのである。それに気きが付つかぬ主人夫婦しゅじんふうふはしきりにこの質問しつもんに対したいして相談そうだんをしている。

「何時頃かな」

「そうですね」と細君さいくんは考かんがえる。考おもえれば分わかると思おもっているらしい。

「あなたは夕ゆうべ何時おやすに御休ごやすみになったんですか」

「俺おれの寝たねのは御前おまえよりあとだ」

「ええ私わたくしの伏ふせったのは、あなたより前まえです」

「眼めが覚さめたのは何時なんじだったかな」

「七時半しちはんでしたらう」

「すると盗賊とうぞくの這入はいったのは、何時頃なんじごろになるかな」

「なんでも夜なかでしょう」

「夜中は分りきっているが、何時頃かと云うんだ」

「たしかなところはよく考^{かんが}えて見ないと分りませんわ」と細君はまだ考えるつもりでいる。巡査はただ形式的に聞いたのであるから、いつ這入ったところが一向痛痒を感じないのである。嘘^{うそ}でも何でも、いい加減な事を答えてくれれば宜^よいと思っているのに主人夫婦が要領^{ようりょう}を得ない問答^{もんどう}をしているものだから少^{しょう}々^{しょうじ}焦れなくなると見えて

「それじゃ盗難^{じこく}の時刻は不明^{ふめい}なんですな」と云うと、主人は例^{れい}のごとき調子^{ちょうし}で

「まあ、そうですな」と答える。巡査は笑^{わら}いもせずに

「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝たところが盗賊^{あまど}が、どこそこの雨戸^{あまど}を外^{はず}してどこそこに忍び込んで品物^{しもの}を何点^こ盗^{しな}んで行^{なん}ったから右告^い訴^{みぎ}及^{くそ}候^{およ}也^びという書^{しょう}面^{めん}をお出^だしなさい。届^{とど}け^けではない告^な訴^{あて}です。名宛^{ほう}はない方がい

「品物は一々^{いちいち}かくんですか」

「ええ羽織^{はおり}何点^{なん}代^{てん}価^{だい}い^{いか}くらと云^{ふう}う風^{ふう}に表^{おもて}にして出^しすんです。——いや這入^{しかた}って見^みた^たって仕^{しか}方^たがない。盗^とられたあとなんだから」と平^{へい}気^きな事^{こと}を云^{かえ}って帰^ゆって行^いく。

主人^{しゅじん}は筆^{ふで}硯^{すずり}を座敷^{ざしき}の真^ま中^{なか}へ持^もち出^だして、細^{さい}君^{くん}を前^{まえ}に呼^よびつ^つけて「これから盗^{とう}難^{なん}告^{こく}訴^そをかくから、盗^とられたものを一^{いち}々^{いち}云^いえ。さあ云^{けん}え」とあ^かた^かも喧^{けん}嘩^かでもするよ^くうな口^く調^{ちょう}で云^いう。

「あら厭^{いや}だ、さあ云^{けん}えだ^{べい}なんて、そ^だんな権^{けん}柄^{べい}ず^くで誰^{だれ}が云^いうも^もん^んですか」と細^ほ帯^そを巻^まき付^つけたま^まどっ^こかと腰^{こし}を据^すえる。

「その風^{ふう}は^{しゅ}な^くだ、宿^{しゅ}場^く女^{にょ}郎^{らう}の^{でき}出^そ来^こ損^みい^お見^びた^でよう^こだ。な^なぜ^な帯^おを^しめ^めて^で出^こて来^こん」

「これで悪^わる^かければ買^くって下^{くだ}さい。宿^{しゅ}場^く女^{にょ}郎^{らう}でも何^{なん}でも盗^しら^かれ^たり^や仕^し方^かが^ない^じや^あり^ませ^せん^んか」

「帯までとって行ったのか、^{ひど} ^{やつ} 苛い奴だ。それじゃ帯から書き付けてやろう。帯はどんな帯だ」

「どんな帯って、そんなに何本もあるものですか、^{くろじゆす} ^{ちりめん} ^{はらあわ} 黒縞子と縮緬の腹合せの帯です」

「黒縞子と縮緬の腹合せの帯一筋——^{あた} 価はいくらくらいだ」

^{ろくえん}
「六円くらいでしょう」

「^{なまいき} ^{たか} 生意気に高い帯をしめてるな。^{こんど} ^{いちえんごじゅっせん} 今度から一円五十銭くらいのにしておけ」

「そんな帯があるものですか。それだからあなたは^{ふにんじょう} 不人情だと云うんです。^{にようぼう} 女房などは、^{きた} ^{じぶん} ^よ ^{かま} どんな汚ない風をしていても、自分さい宜けりや、構わないんでしょう」

「まあいいや、それから何だ」

「^{いとおり} ^{はおり} 糸織の羽織です、あれは^{こうの} ^{おば} ^{かたみ} 河野の叔母さんの形身にもらったんで、^{おな} ^{いま} 同じ糸織でも今の糸織とは、^{ちが} たちが違います」

「そんな^{こうしゃく} ^き 講 積は聞かんでもいい。^{ねだん} 値段はいくらだ」

^{じゅうごえん}
「十五円」

「十五円の羽織を着るなんて^{みぶんふそうとう} 身分不相当だ」

「いいじゃありませんか、あなたに買っていただきやあしまいし」

「その次^{つぎ}は何だ」

「^{くろたび} ^{いっそく} 黒足袋が一足」

^{おまえ}
「御前のか」

「あなたんでさあね。^{だいか} ^{にじゅうななせん} 代価が二十七銭」

「それから？」

やま いも ひとほこ
「山の芋が一箱」

「山の芋まで持って行ったのか。煮て食うつもりか、とろろ汁にするつもりか」

「どうするつもりか知りません。泥棒のところへ行って聞いていらっしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだんまでは知りません」

「そんなら十二円五十銭くらいにしておこう」

「馬鹿馬鹿しいじゃありませんか、いくら唐津から掘って来たって山の芋が十二円五十銭してたまるもんですか」

「しかし御前は知らんと云うじゃないか」

「知りませんわ、知りませんが十二円五十銭なんて法外ですもの」

「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ。まるで論理に合わん。それだから貴様はオタンチン・パレオロガスだと云うんだ」

「何ですって」

「オタンチン・パレオロガスだよ」

「何ですそのオタンチン・パレオロガスって云うのは」

「何でもいい。それからあとは——俺の着物は一向出て来んじゃないか」

「あとは何でも宜うござんす。オタンチン・パレオロガスの意味を聞かして頂戴」

「意味も何にもあるもんか」

「教えて下さってもいいじゃありませんか、あなたはよっぽど私を馬鹿にしていっしやるのね。きっと人が英語を知らないと思つて悪口をおっしゃったんだよ」

「^ぐ愚^{こと}な^い事^いを^{はや}言^いわ^いんで、^{早く}早^いく^いあ^いと^いを^い云^いう^いが^い好^いい。早^{こくそ}く^そ告^{しな}訴^{もの}を^{かえ}せ^んと^{かえ}品^{かえ}物^{かえ}が^{かえ}返^{かえ}らんぞ」

「^{いま}どう^{いま}せ^{いま}今^{いま}か^{いま}ら^{いま}告^{いま}訴^{いま}を^{いま}し^{いま}た^{いま}つ^{いま}て^{いま}間^{いま}に^{いま}合^{いま}い^{いま}や^{いま}し^{いま}ま^{いま}せ^{いま}ん。それ^{いま}よ^{いま}り^{いま}か、オ^{いま}タ^{いま}ン^{いま}チ^{いま}ン・パ^{いま}レ^{いま}オ^{いま}ロ^{いま}ガ^{いま}ス
を^{いま}教^{いま}え^{いま}て^{いま}頂^{いま}戴^{いま}」

「^{おんな}うる^{おんな}さい^{おんな}女^{おんな}だ^{おんな}な、^い意^い味^いも^い何^いに^いも^い無^いい^いと^い云^いう^いに」

「^{ほう}そんな^{ほう}ら、^{ほう}品^{ほう}物^{ほう}の^{ほう}方^{ほう}も^{ほう}あ^{ほう}と^{ほう}は^{ほう}あ^{ほう}り^{ほう}ま^{ほう}せ^{ほう}ん」

「^{がんぐ}頑^か愚^かだ^かな。それ^かで^かは^か勝^か手^かに^かす^かる^かが^かい^かい。俺^{おれ}は^{おれ}も^{おれ}う^{おれ}盗^{とう}難^{なん}告^か訴^かを^か書^かい^かて^かや^から^かん^かから」

「^{わたくし}私^しも^し品^し数^しを^し教^しえ^して^し上^しげ^しま^しせ^しん。告^あ訴^あは^ああ^あな^あた^あが^あ御^ご自^じ分^{ぶん}で^ごな^ごさ^ごる^ごん^ごで^ごす^ごか^ごら、私^{わたくし}は^{わたくし}書^{わたくし}い^{わたくし}て^{わたくし}い^{わたくし}た^{わたくし}だ^{わたくし}か^{わたくし}な^{わたくし}い^{わたくし}で^{わたくし}も^{わたくし}困^こり^ませ^まん」

「^よそれ^よじ^よや^よ廢^よそう^よ」と^{しゅ}主^{しゅ}人^{じん}は^{れい}例^{れい}の^{れい}ご^{れい}と^{れい}く^{れい}ふ^{れい}い^{れい}と^{れい}立^たつ^たて^た書^{しよ}齋^{さい}へ^{はい}這^{はい}入^{はい}る。細^{さい}君^{くん}は^{ちゃ}茶^まの^ま間^ひへ^さ引^ひき^さ下^さ
が^{はり}つ^{はり}て^{はり}針^{はり}箱^{ばこ}の^{まえ}前^{まえ}へ^{すわ}坐^{すわ}る。兩^ふ人^{たり}共^{とも}十^{じゅう}分^{ぶん}間^{かん}ば^{かん}か^{かん}り^{かん}は^{なん}何^{なん}に^{なん}も^{なん}せ^{なん}ず^{なん}に^{なん}黙^だま^だつ^だて^だ障^{しょう}子^じを^{にら}睨^つめ^つ付^つけ^つて^つい^つる。

と^いこ^いろ^いへ^い威^{げん}勢^{かん}よく^{げん}玄^{やま}関^いを^いあ^いけ^いて、山^いの^い芋^きの^き寄^き贈^{ぞう}者^{しゃ}多^た々^{さん}良^{べい}三^い平^{くん}君^{あが}が^{あが}上^あつ^あて^あく^ある。多^た々^{さん}良^{べい}三^い平^{くん}君^{あが}は^{あが}も^あと^あこ^あの^あ家^あの^あ書^か生^いで^いあ^いつ^いた^いが^い今^いで^いは^い法^{ほう}科^か大^だ学^{がく}を^そ卒^そ業^{ぎょう}し^てあ^る会^{かい}社^{しゃ}の^{こう}鉦^{ざん}山^ぶ部^{やと}に^{やと}雇^{やと}わ^れて^いい^る。こ^じれ^じも^じ実^め業^{ばえ}家^めの^す芽^ぎ生^うで、^す鈴^す木^ぎ藤^{とう}十^{じゅう}郎^{ろう}君^{こう}の^{しん}後^{せい}進^{せい}生^{せい}で^ある。三^い平^{ざん}君^{かん}は^い以^い前^{ぜん}の^{かん}関^{けい}係^いか^らら^と時^{とき}々^{とき}
旧^{きゅう}先^{せん}生^{せい}の^{そう}草^{ろう}廬^{もん}を^に訪^に問^{ちよう}し^て日^{いち}曜^ちな^あど^そに^かは^か一^か日^か遊^{えん}ん^りで^よ帰^よる^よく^らい、こ^かの^か家^か族^{ぞく}と^{えん}は^り遠^{えん}慮^りの^ない^い
間^{あい}柄^だが^らあ^らる。

「^{おく}奥^{てん}さん。よ^{てん}か^{てん}天^{てん}気^きで^{てん}ご^{てん}ざ^{てん}り^{てん}ま^す」と^{から}唐^な津^な訛^なり^なか^な何^なか^なで^な細^た君^{ひざ}の^た前^{ひざ}に^たズ^たボ^たン^{ひざ}の^たま^ま立^たて^た膝^{ひざ}を^たつ^{ひざ}く。

「^おお^おや^お多^お々^お良^おさん」

「^で先^で生^では^でど^でこ^でぞ^で出^でな^です^でつ^でた^でか」

「^いい^いえ^い書^い齋^いに^いい^いま^いす」

「^{おく}奥^{せん}さん、^{せん}先^{せん}生^{せん}の^{べん}ご^{きょう}と^{べん}勉^{きょう}強^{きょう}し^{どく}な^{どく}さ^{どく}ると^{どく}毒^{どく}で^{どく}す^{どく}ば^{どく}い。た^にま^にの^に日^に曜^{ちよう}だ^にもの、あ^にな^にた」

「わたしに言っても駄目だから、あなたが先生にそうおっしゃい」

「そればってんが……」と言い掛けた三平君は座敷中を見廻わして「今日は御嬢さんも見えんな」と半分妻君に聞いているや否や次の間からとん子とすん子が馳け出して来る。

「多々良さん、今日は御寿司を持って来て？」と姉のとん子は先日の約束を覚えていて、三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭を搔きながら

「よう覚えているのう、この次はきっと持って来ます。今日は忘れた」と白状する。

「いやーだ」と姉が云うと妹もすぐ真似をして「いやーだ」とつける。細君はようやく御機嫌が直って少々笑顔になる。

「寿司は持って来んが、山の芋は上げたろう。御嬢さん喰べなさったか」

「山の芋ってなあに？」と姉がきくと妹が今度もまた真似をして「山の芋ってなあに？」と三平君に尋ねる。

「まだ食いなさらんか、早く御母あさんに煮て御貰い。唐津の山の芋は東京のとは違つてうまかあ」と三平君が国自慢をすると、細君はようやく気が付いて

「多々良さんせんだつては御親切に沢山ありがとう」

「どうです、喰べて見なすつたか、折れんように箱を誂らえて堅くつめて来たから、長いままでありましたらう」

「ところがせつかく下すつた山の芋を夕べ泥棒に取られてしまつて」

「ぬす盗が？ 馬鹿な奴ですなあ。そげん山の芋の好きな男がおりますか？」と三平君大に感心している。

「御母あさま、夕べ泥棒が這入つたの？」と姉が尋ねる。

「ええ」と細君は軽く答える。

「泥棒が這入って———そうして———泥棒が這入って———どんな顔をして這入ったの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか分らんので

「怖い顔をして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。

「怖い顔って多々良さん見たような顔なの」と姉が気の毒そうにもなく、押し返して聞く。

「何ですね。そんな失礼な事を」

「ハハハハ私わたしの顔はそんなに恐いですか。困こまったな」と頭あたまを搔く。多々良君の頭の後部には直径一寸ばかりの禿はげがある。一カ月前から出来だして医者に見て貰もらったが、まだ容易よういに癒りそうもない。この禿だいちばんを第一番に見付けたのは姉のことん子である。

「あら多々良さんの頭は御母さまのように光ひかってよ」

「だまっていらっしゃいと云うのに」

「御母あさまゆう夕べの泥棒の頭も光しつもんかってて」とこれは妹の質問である。細君と多々良君とは思おもわず吹き出したが、あまり煩わずらわしくて話はなしも何も出来ぬので「さあさあ御前おまえさん達は少すこし御庭へ出て御遊おにわびなさい。今いまに御母あさまが好いい御菓子おかしを上げるから」と細君はようやく子供こどもを追おいやって

「多々良さんの頭はどうしたの」と真面目まじめに聞いて見る。

「虫むしが食くいました。なかなか癒りません。奥おくさんも有あんなさるか」

「やだわ、虫が食くうなんて、そりゃまげ髻つで釣おんなるところは女おんなだから少しはは禿はげますさ」

「禿ははみんなバクテリアですばい」

「わたしのはバクテリアじゃありません」